

令和 4 年 6 月 27 日現在

機関番号：37105

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K12977

研究課題名（和文）真鍮製彫像の制作法と受容から再考する植民地期西アフリカ芸術

研究課題名（英文）Reanalyzing Western African Art in the Colonial Era through Brass Statues and Their Cultures

研究代表者

柳沢 史明（YANAGISAWA, FUMIAKI）

西南学院大学・国際文化学部・講師

研究者番号：10725732

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：アボメイを中心に製作されてきた真鍮製彫像がダオメ宮廷文化の伝統を引き継ぎつつ、植民地化のなかで導入された失蠟法によって技法や様式の面において、さらにはダオメ内外におけるその受容の面においても大きな変化を経験してきたことが明らかとなった。失蠟法の流入経路の確定は難しいところであるが、これらの彫刻が旅行者や植民者を喜ばせる土産物として機能していたこと、その製造・流通・管理の面において植民者や推進者らが関与していたこと、さらにアサンを飾る新たな造形として製作されことは事実であり、植民地時代の支配とそのなかでの創造を物語る西アフリカの重要な造形文化として位置づけることができる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、1）ダオメにおける失蠟法による真鍮製彫像の歴史を、20世紀初頭の植民地的状況における文化の生成・流通・変容という観点から明らかにし、2）西アフリカを含むアフリカ諸地域の造形物の製作・販売・流通に関する諸問題を対話的・相補的な仕方的分析した。アフリカ由来の「アート」のプロモーションをめくり、研究側の分析と企業側の経験や知見とを共有することで、アフリカと「アート」に関する新たな主題の開拓、さらに企業と研究との新たな協力可能性を提示することができた。

研究成果の概要（英文）：It became clear that the brass statues which had been produced around Abomey carry on the tradition of Dahomey court culture, whereas they had also experienced major changes in terms of technique and style, as well as in terms of acceptance inside and outside Dahomey, by the lost-wax casting introduced in the country during the colonization. Although it is difficult to determine the route of introduction of the lost-wax casting, it is certain that these statues functioned as souvenirs to please travelers, colonials and specialists such as missionary or ethnographer, that colonials and “animateurs” concerned considerably the control of manufacture and of distribution, and that these were produced for Dahomean public as a new art of sculpture to decorate Asen. So these statues can be positioned as an important sculpture culture in West Africa that tells the French colonial domination and the constant creation in it.

研究分野：美術史

キーワード：アフリカ ベナン アフリカ美術 植民地文化 ツーリストアート フランス植民地主義

## 1. 研究開始当初の背景

アフリカ由来の「アート」、とりわけ 20 世紀前半までに作られた仮面や彫刻は木製によるものが歴史的に、また一般的に知られており、金属製の彫像であってもナイジェリアのベニン王国時代の写実的な頭像や装飾板、コートジボワールの金製分銅など一部のものに限られている。アフリカの「アート」に向けられる一般的関心に加え、ダオメ(現ベナン共和国)をめぐる日本語での研究の少なさも関係して、アボメイやコトヌーなどダオメの歴史的都市を中心に製作されていた 5 センチ～20 センチほどの小型の真鍮製彫像は国内での研究が行われてこなかった。しかし、パリのケ・ブランリー美術館やリヨンのアフリカ博物館(2017 年閉館)に収蔵され、現在では「ツーリストアート」としても知られるこれらの彫像は、20 世紀初頭のアフリカ彫刻の美的価値の「発見」に後続する雑誌・新聞記事やその後の仏語・英語によるダオメ文化研究において度々取り上げられてきた。じっさい、その主題や様式、技法や歴史は植民地学者や宣教師、人類学者らによって様々な仕方而言及され、西アフリカの植民地文化・造形文化を考察するうえで一つの要点となりうる可能性を秘めている。本研究は、ツーリストアートの文脈を考慮しつつ、この真鍮製彫像が製作された経緯や背景、その受容をダオメの植民地化の歴史やアフリカの植民地化の過程におけるツーリストアートの開発などの文脈と接続し、歴史研究、実地調査、研究者及び関係者らとの共同研究を行なうことを試みた。

## 2. 研究の目的

研究の目的は第一に、真鍮製彫像の製作された歴史的背景の解明にあるが、そのためには王宮文化を含めたダオメの金属製彫像史、さらにフランスによる植民地支配とそれがもたらす造形上の影響の有無など、彫像の歴史・技法・様式のみならず植民地文化研究を含めた分析と考察が求められる。加えて 19 世紀末から 20 世紀初頭のフランス宣教師らによるダオメ布教とその成果として持ち帰られた作品群、また行政官や人類学者らによって依頼製作された彫像群はツーリストアートとして真鍮製彫像が機能していたことを示しており、こうした地域間でやり取りされる彫像の美的かつ土産物的・商品的価値の実状も明らかにすることが求められよう。

ダオメの真鍮製彫像が土産物として機能する歴史的・社会的背景の分析に関していえば、アフリカ由来の「アート」がどのような文脈で製作・販売され別の地域へと移動するかという、商品流通や作品の販売促進の過程、「アート」としての資格の保証やアートワールドへの売り込みをめぐる諸問題と不可分であり、それらの検討や解明が本研究課題の第二段階の目的となる。そこで、ベナンの真鍮製彫像を一事例に、アフリカ由来のアートが製作・販売・流通される様々な事例をアフリカの他の地域や分野を活躍の場としている研究者や企業の力を借りて分析・検討することで、アフリカからアートを「売り込む」ことの困難や課題、その歴史と実状を解明することを目指した。

## 3. 研究の方法

本研究の遂行にあたって、ベナンのコトヌー、アボメイを中心とした実地調査、ポルト＝ノヴォの国立アーカイブでの資料調査、フランスの国立図書館等での資料調査等に加え、

Gallica での 20 世紀初頭の新聞・雑誌資料の渉猟、先行研究の検討・分析を行った。途中、所属先の変更およびコロナ禍に見舞われたため、2020 年度以降は十分な海外調査を実施することができず、当初予定していたケ・ブランリー美術館やリヨンの旧アフリカ博物館での保存資料調査・分析は断念せざるを得なかった。しかし、本研究をツーリストアートの文脈と接続し、他の研究者や企業の方々との意見交換の場としてシンポジウムを企画し、2019 年 12 月に実施、さらに個々の研究発表の彫琢したうえで 2021 年に書籍として刊行できたことは、上述した当初の研究プロジェクトを補って余りある結果をもたらしたものと考えている。

#### 4. 研究成果

初年度は 19 世紀末から大量に制作された真鍮製小像制作に関して、個人でのテーマ研究を遂行するとともに、近接領域の研究者や実務家の協力を仰いだシンポジウムの開催を実施した。前者に関しては、植民地時代の記述や先行研究での扱われ方を主に分析しつつ、こうした小像が、アポメイ外部からの影響を受けつつダオメの王家に属していた特定の血縁集団を中心に制作され伝播したものであること、宣教師や植民者らに向けた「ツーリストアート」としての側面を備えていること、さらには当地の先祖崇拜と関わる持ち運び可能な祭壇「アサン」の台座装飾への流用がされはじめたことなど、植民地化を通じた文化変容を多分に反映しているものであることを明らかにした。これらの歴史的側面の研究に加え、失蠟法をはじめとした金属工芸制作の基礎的知識を学ぶため、都内の金属工芸研究者・作家の作業場を訪問し具体的に制作現場や手法等のレクチャーを受けた。制作に用いる具体的な素材や技法の特徴、鞆の崇拜など本研究と様々な点で関わりつつも文字資料では必ずしも把握しきれない制作現場の諸主題への理解が深まると同時に、金工と地域性・宗教性など、本研究領域が様々な方向へと広がるものであるとの認識を得た。本年度実施したもう一つの大きな研究は、近接領域の研究者及び企業との共同によるものであり、「アフリカからアート売り込む 研究と企業の活動から考える現状と展望」と題したシンポジウムの企画及び実施である。「ツーリストアート」をはじめ「販売」「売買」を重要な目的とした「アート」に着目しつつ、アフリカから「アート」を売り込むという主題の歴史、現代のアフリカや世界、さらに学会や大学機関等に及ぼす影響や問題点等を、研究代表者を含む発表者 6 名が検討した。聴講者も 100 名を超え少なからぬ反響を呼んだものと考えている。

2020 年度は、前年度に行ったシンポジウム「アフリカからアートを売り込む」の成果を一般に公表するため、シンポジウム登壇者らとともに書籍化のプロジェクトを推し進めた。具体的にはシンポジウム登壇者らへの発表原稿の修正・推敲の依頼を行なうとともに、書籍内収録予定となるアフリカのアート販売を行う企業代表者二名及び研究者二名との座談会の実施、企業二名の原稿に対する応答文などの執筆を行った。研究代表者自身の研究としては、前年度のシンポジウム原稿及び前年度に行ったフィールドワークをもとにベナンの真鍮製彫像の作成・受容の歴史をフランス植民地主義の歴史、西アフリカ諸地域における「推進者 animator」との関係で分析した。さらに、書籍の序文として、アフリカ彫刻を日本へと「売り込む」歴史をデパートでの展示やアフリカ協会による支援などに着目し、日本におけるアフリカ由来のアートをめぐる受容・研究の展望について資料収集を進めた。これらの研究成果は 2021 年度初頭に『アフリカからアートを売り込む 企業×研究』(仮題)として刊行予定である。また、1920~30 年度のフランスにおけるアフリカ彫刻受容の一側面として、美術批評家 W・ジョルジュの批評に焦点を当て、「アール・ネーグルの黄昏」をキーワ

ードに、ジョルジュのアフリカ彫刻観、モダニズム観を明らかにする発表を行った。上記以外にフランス植民地史・文化論に関する書評1本の執筆、民族誌・文化人類学と芸術に関するフランス語文献の翻訳を4本(2021年度以降に順次刊行・発表予定)実施した。

最終年度にあたる2021年度は研究成果として、先述したシンポジウム「アフリカからアートを売り込む 研究と企業の活動から考える現状と展望」を書籍の形で発表した(『アフリカからアートを売り込む 企業×研究』水声社、2021年)。上に述べたとおり、研究代表者は、研究課題であるベナンの失蠟法による真鍮製彫像の販売・製作の現状やそのツーリストアートとしての流通の歴史に焦点を当てた論文を執筆し、植民者や「推進者」らの影響や、その土産物としての流通の背後にダオメ王宮芸術や植民地化後の民衆的宗教芸術の歴史が深く関与していることを明らかにした(「植民地状況下のアート ダオメ王国文化とツーリストアート」)。加えて、書籍では、日本においてアフリカ由来の芸術が官民主導によって展示・導入されてきた歴史を論じた序文(「アフリカからアートを売り込む 序文にかえて」)や、企業側参加者らのエッセイに対する研究者の立場からの考察を二本(「アフリカからアートを運ぶ」「ティンガティンガ、その歴史と変化」)執筆した。また、論集寄稿者らとの対談二回分を再録・編集したもの(「アフリカからアートを売り込む その遍歴をたどり経路をさぐる」「人々とアートをつなぐ、アフリカと日本をつなぐ」)の執筆・編集を共編者である緒方しらべ氏とともにいった。

真鍮製彫像のさらなる調査にあたって、アボメイでのフィールドワークや、リヨンのアフリカ宣教会の収蔵品調査等を実施したかったが、コロナ禍のため海外での実地調査・資料収集は断念しすでに収集した資料の整理や先行研究の分析、先述の書籍の参加者との意見交換等を行ない、課題研究を遂行した。収集した資料やデータをもとに、今後さらなる研究成果の公表を行ないたい。

研究期間全体を通じ、アボメイを中心に製作されてきた真鍮製彫像がダオメ宮廷文化の伝統を引き継ぎつつ、植民地化のなかで新たにベナンに導入されてきた失蠟法によって技法や様式の面において、さらにはダオメ内外におけるその受容の面においても大きな変化を経験してきたことが明らかとなった。失蠟法の流入がフランス及び西洋の植民者や商人らによるものか、あるいは他のギニア湾沿岸地域に由来するものかは判断が難しいところであるが、これらの彫刻が19世紀末から20世紀初頭において旅行者や植民者を喜ばせる土産物として機能していたこと、その製造・流通・管理の面において植民者や推進者らが関与していたこと、さらにアボメイにて製作されたアサンを飾る新たな造形として製作されことは確実であり、植民地時代の支配とそのなかでの創造を物語る西アフリカの重要な造形文化として位置づけることができる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 柳沢史明	4. 巻 36
2. 論文標題 ニグロ芸術と黒人芸術	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 arts（民族芸術学会会誌）	6. 最初と最後の頁 22-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 柳沢 史明
2. 発表標題 《アール・ネーグル》の黄昏 ヴァルデマール・ジョルジュがみたアフリカ彫刻とモダニズムの行く末
3. 学会等名 日仏美術学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 柳沢史明
2. 発表標題 植民地状況下のアート ダオメ王国文化とツーリストアート
3. 学会等名 科研費シンポジウム「アフリカからアートを売り込む 研究と企業の活動から考える現状と展望」
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 柳沢史明、緒方しらべ	4. 発行年 2021年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 248
3. 書名 アフリカからアートを売り込む 企業×研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------